

Office for Gender Equality, Yamagata University

NEWS Letter



未来につなげる女性研究者の育成 ～平成24年度山形大学男女共同参画シンポジウムから～

11月19日(月)、小白川キャンパス理学部S401教室で山形大学男女共同参画シンポジウムを開催しました。平成23年11月に、県内5高等教育機関の運営関係者を中心として採択された「男女共同参画に向けた大学連携・山形宣言」から丁度1周年を迎えた今回は、大学コンソーシアムやまがたと共催での開催となりました。11機関から68人、学部生・大学院生17人、一般の方16人、合計101人が参加し、結城章夫山形大学長、遠藤恵子山形県立米沢女子短期大学長の挨拶のあと、女性研究者育成に向けた講演やパネルディスカッションが行われました。

1. 基調講演「女性研究者育成のこれから」



小舘香椎子氏の基調講演

小舘香椎子氏 (独)科学技術振興機構男女共同参画主監、日本女子大学名誉教授

3人のお子さんを育てながら光エレクトロニクスの研究を続けてこられた小舘先生は、特許数も10以上に上るなど顕著な成果を上げながら、各種学会委員や政府委員を歴任されてこられました。平成20年の日本学術会議提言「学術分野における男女共同参画促進のために」では、その中心メンバーとなっておられます。

基調講演の中で、育成を目指す女性研究者像は、「国際社会で活躍できるバランス感覚のある女性研究者／オピニオンリーダー」であり、その育成の3本柱は、1. 多様でイノベーションにつながる研究の推進、2. 指導(教育)能力の習得・向上、3. 研究室運営を含むマネジメント・スキルの向上、であると述べられました。さらに、女性の研究成果の「見える化」に向けて競争的資金への積極的応募と国際共同研究・交流への参加を推奨されるなど、エールを送っていらっしゃいました。

2. 取組紹介「広がる女性の育成と活躍」

次に、県内3機関から3人の方の取組紹介がありました。まず、平成24年度SPP(サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト)に採択された山形県立山形西高等学校の「山西リケジョプロジェクト」の担当教諭 佐々木隆行氏から、理系女子生徒の進路選択の幅を広げる試みとして研究室訪問が報告されました。理系クラス的女子生徒の進路選択が看護医療分野に偏り過ぎており、厳しい競争と敗者を生み出し、未来をリードする理系の人材を失っているのではないかと懸念がプロジェクトの背景にあるということです。

次いで、史上最年少で杉田玄白賞を受賞し平成24年度専門学科で初の女性教員として採用された鶴岡工業高等専門学校物質工学科助教の平尾彰子氏から「食事が薬になる科学」と題して研究状況の報告がありました。これまで研究を続けていく上でメンターの存在が大きく感謝しているということでした。

最後に、2人の男の子を子育て中の山形大学理学部の井深章子准教授から、「仕事と子育て～その現状について～」と題して報告がありました。学部生の時に、動く画面でタンパク質の構造を見た時の感動が大きく、それ以来、タンパク質の構造解析と性質を研究しているということです。出産と夫の海外赴任の際の退職や常勤から非常勤への変更など、プライベートとリンクして仕事を変えざるを得なかった状況があったが、女性研究者支援が始まって勇気づけられているということでした。

3. パネルディスカッション「男女共同参画に向けて」

取組紹介を受けて、後半は東北公益文科大学教授 伊藤真知子氏の進行により、山形西高等学校長 阿部和久氏、鶴岡工業高等専門学校副校長 宮崎孝雄氏、山形大学男女共同参画推進室 木村松子チーフ・コーディネーターをパネラーとして、女性の育成や支援についてパネルディスカッションが行われました。理系女性研究者を増やすために、さらに中学校との連携も必要であるなど、参加者との質疑応答も含め充実したディスカッションとなりました。



最後に、小舘氏から、「高等学校や工業高等専門学校の取組みを知り、また校長先生方の熱心なお話を聞き大変心強く感じた。これまであまり聞く機会がなかった取組みなので期待したい。」というコメントがありました。また、「研究継続支援員制度など大学の支援を受けた研究者には是非成果を上げていただきたい。また、研究支援に携わった学生の成長も望みたい。」という励ましがありました。